

アニメで知る心の世界

こもれば心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：エヴァンゲリオン 新劇場版 序

あらすじ

突如世界を襲った未曾有の大災害“セカンド・インパクト”。この影響で人類の半数近くは死にいたり、世界の各地には大破壊の痕跡が刻みこまれた。その15年後、14歳の少年・碇シンジは父親から第3新東京市へ呼び出されたのだった。ちょうどそのとき第四の使徒が出現し、国連軍と激しい交戦を開始した。爆風に巻きこまれ、危機に陥るシンジ。その生命を救ったのは、葛城ミサトと名乗る女性だった。

ミサトの車で特務機関NERV（ネルフ）の本部へと連れていかれ、シンジは父と3年ぶりの再会をはたした。しかし、シンジは父の碇ゲンドウから極秘裏に開発された人造人間エヴァンゲリオンをみせられ、そこに搭乗し、使徒との戦いを強要される。当初、それに拒絶をしたシンジではあったが、満身創痕の綾波レイが必死にエヴァンゲリオンに搭乗しようとする姿を目のあたりにして、シンジは「逃げちゃダメだ」と何度も唱え、ついに自ら出撃を決意する。

何の訓練も受けないままに、初めて使徒と対峙する EVA 初号機のシンジ。

命運を託された 14 歳の少年シンジは、どう使徒と立ち向かうのか？

そしてシンジは使徒と立ち向かう中で自分の存在とは何か、どう世界と向き合うのか考え、彷徨い、苦しみながら答えを見出していく。まさに戦いを通じて思春期の混乱と葛藤を生々しく描いた作品である。

今月のテーマ

I. ロボットアニメとエヴァンゲリオン

II. 碇の心の成長について考えていく

I. ロボットアニメとエヴァンゲリオン

1. ロボットアニメとは

1970 年代に登場したアニメ。「マジンガーZ」に代表されるように少年が巨大な人型ロボットに乗り込み、強い敵を倒していく。

味方（良い対象）と敵（悪い対象）に分かれて（スプリット）、主人公がロボットを操りながら、敵を倒していくという万能空想に浸る。妄想分裂ポジションの懐古的側面があるように感じられる。

→勸善懲悪の典型例：連続性がなく、深みにかけてしまう。

そのために当初子供向けの番組として作られることが多く、玩具のコマーシャルとして使われていた部分がある。

そもそも敵（悪い対象）とは何か？自分と自分を庇護してくれていた母親以外の第三者

→とりもなおさず父親の存在（エディプス葛藤）

エディプス葛藤とは？

ギリシャ神話であるエディプス王の悲劇的運命になぞらえている。その神話にはエディプス王が父親を殺し母と結婚するということが描かれている。その点にフロイト（精神分析の創始者）は着想を得て、考え出された概念。

乳幼児期から性愛衝動をもち、無意識に異性の親の愛情を得ようとし、同性の親に対しては嫉妬する、その葛藤を表す。当初4歳から6歳に現れるが、心身の成長が著しい思春期にその葛藤が再び強く出現する。

主人公が大きなロボットに乗って、敵う訳ない巨大な敵を倒すという万能空想であり、それは潜伏期の少年がエディプス期に敵わない存在であった父を倒すという万能空想を体現している。

2. ロボットとエヴァンゲリオンはどう違うのか？

エヴァンゲリオンの特徴とは？

エヴァンゲリオン：主人公らの乗る汎用人型決戦兵器。見た目から巨大ロボットのように見えるが、正確には外部装甲型の人造人間。であり、「A.T.フィールド」と呼ばれ、防御壁を持つことから、使徒に対抗できる唯一の存在とされる。

1) 人間が愛情を抱くときに使うとされる A10 神経を介した神経接続によるコントロールシステムを採用している。

A10 神経：ドーパミン系神経、報酬系神経とも呼ばれ、脳幹の腹側被蓋野という場所から出て、視床下部から怒り・恐怖などの感情の制御に関わる扁桃体や、記憶に深く関わる海馬、欲求の実現に向け指令を出す側坐核、大脳辺縁系を経て、人間らしい精神活動や創造の働きに重要な前頭連合野と、記憶・学習を総合する側頭葉へとつながる神経

→喜怒哀楽の発現とその制御・統合に関わる人間の情緒に深く関わる神経

2) パイロットが乗り込むコクピット容器は LCL という液体で満たされ、パイロットは L.C.L を肺に取り込むことで体に直接酸素を供給される。

→まるで子宮の中で羊水に包み込まれた胎児のような印象

3) 使徒と同様に「A.T.フィールド」と呼ばれる防御壁を持っている。

A.T.フィールド：Absolute Terror FIELD（絶対恐怖領域）の略称であり、全ての生命が自らを形成するべく持っている自我境界

4) パイロットは母のいない14歳の子供から選抜される。

つまりエヴァンゲリオンは情緒的に深く関わる母のような存在。

→ロボット自体父親的側面が強い一方でエヴァンゲリオンは母性を強く押し出している。

3. エヴァンゲリオンとガンダムの違いは

機動戦士ガンダムというアニメはロボットアニメの枠組みを大きく変えていく。ガンダムでは、敵に対する迫害感や攻撃性だけでなく、敵として戦っていた人たちの人間模様をも丁寧に描いている。そしてガンダムに乗り込んだアムロ

が敵の艦隊やモビルスーツを倒す中で、相手側の立場を理解し、苦悩し、アムロは非常に心を痛め、苦悩し、それでも戦い続けなければならず、そのなかで葛藤し続け、成熟していく。

そこでは、単なる勧善懲悪を超え、エディプス葛藤を経て大人に成長していく物語として描かれている。

一方でエヴァンゲリオンは敵となる使徒は非常に無機的でそこにはガンダムのような敵の人間模様は描かれていない。

その戦いはなにかルーチンなタスク（決まりきった課題）のようにも感じられる。しかしそのタスクに常に振り回される人々。誰が悪いわけでもなく、否応がなく押し込まれる過酷さ。そしてそこに主人公の孤独さを強く感じる一方で、受け身的で主体性の確立ができていないようにも感じられる。それが社会の過酷さのようにも感じられる。その中でエヴァンゲリオンに乗って戦う主人公碓井シンジもそこに振り回され、苦悩する。使徒と戦っていくことは、ガンダムのように他者との深い関わりと苦悩のではなく、自身の孤独と存在を見つめることのように感じられる。

このアニメではシンジの独白が数多く描かれ、彼を取り巻く人々との会話を通じて、常に自意識過剰なまでに自分とは何者なのか？ということに常に問いかけている。

それは自分自身が大人になり、否応なく社会の枠組みに入っていくかざるを得ない怖さと戸惑いの中で他者との情緒的関わりを極端に怖がる一方で、強く繋がりたい思いもありその苦悩がヒシヒシと伝わってくる。それは一人の個として分離し、独立していく怖さのようにも感じられる。(言うなれば、エディプス期以前の口唇期から肛門期への移行の怖さ)

それが思春期を始めとした多くの若者の心に突き刺さり、彼らの心をとらえて話さない作品になっているように感じられる。

ガンダム：エディプス葛藤

エヴァンゲリオン：エディプス葛藤以前の分離个体化

II. 碇の心の成長について考えていく

1. 使徒が襲来し、碇シンジがにエヴァンゲリオン乗り込み、戦った

ことは何を象徴しているのか？

1) 思春期に関して

二次性徴に前後して自分自身の心身に大変動が生じる。

潜伏期に一旦は収まっていたエディプス葛藤が再び起き、自身のこれまでのア

イデンティティが揺らぎ、今までの社会的、家庭的秩序を揺さぶる。

このとき困難である様々な情緒的葛藤を生じる：喪失、選択、独立、幻滅、混

乱 etc

思春期の真っ只中にいる彼らにとって、それはこれまで平穏な世界が突然、何

者かがやってきて崩壊していく恐怖や混乱、喪失の感情に襲われる。

2) エヴァンゲリオン 新劇場版 序の冒頭部について考察する。

第3新東京市に上京した碇シンジは、葛城ミサトと待ち合わせるために公衆

電話で電話をかけ、繋がらず、途方に暮れる。その周囲の景色は青い空に蝉の

鳴き声が聞こえ、人が全然おらず、静かで凜のような世界。一方で特別非常事

態宣言が発令されている。

→潜伏期の穏やかな世界から突如訪れる思春期の嵐の到来の予兆のようにも感じられる。(そこで綾波レイの幻影が映る。)

その後使徒が現れ、攻撃機が次々を破壊され、その破片がシンジの目の前に落ち、使徒がシンジに近接し、シンジは恐怖のあまり、怯え、動けず立ち尽くしてしまう：思春期の情緒的葛藤に伴う恐怖、混乱であり、Adolescence Process（青年期に至る過程）の始まりである。

そこに葛城ミサトが現れ、ネルフ本部にシンジを誘う。

→この構図：平和な世の中で人々が暮らしていたが、突然脅威となる対象が出現し、これまでの秩序を壊し、周りの人々は混乱する。その中で主人公が自分の生きるべき道を見出し、成長していく

この構図でエヴァンゲリオンで気になる点

平和な世の中：誰もいない静まり返った世界→シンジ自身の孤独さ。しかし感情がないもののように扱う彼自身の空虚さ。

リッコ「ヤマアラシの場合、相手に自分のぬくもりを伝えたいと思っても、身を寄せれば寄せるほど身体中のトゲでお互いを傷つけてしまう。人間にも同じことが言えるわ。今のシンジ君は、心のどこかで、その痛みにおびえて臆病になっているんでしょうね」

→シンジは秒速5センチメートルの貴樹のように自己愛的な膜を作る（自己愛構造体：いわば A.T.フィールドか）ことで自分の心を守っているように感じられる。

思春期に向かう中で向き合わざるを得ない問題点。

エヴァンゲリオン 新劇場版 序は、主人公のシンジが如何にその自己愛的な殻を破って一人の成熟した個になっていく心の過程を詳細に描いているように感じられる。

3) 父にエヴァに乗るよう指令され、碇シンジが当初拒否しながらもエヴァに乗る場面で何がおきていたのか？

父「……久しぶりだな」

シンジが上を見上げると、高い位置に設置されたコントロールルームのガラス窓から、ゲンドウがシンジを見下ろしている。

シンジ「父さん……」

シンジはゲンドウから目を逸らす。

父「ふっ。……出撃」

その後リツコにエヴァに乗るように指示される。それに驚きを隠せないシンジ

シンジ「父さん、なぜ呼んだの？」

父「お前の考えている通りだ」

シンジ「じゃあ、僕がこれに乗って、さっきのと戦えって言うの？」

父「そうだ」即答する。

シンジ「嫌だよそんなの！何を今更なんだよ！父さんは、僕が要らないんじゃないの？」

父「必要だから呼んだまでだ」

シンジ「なぜ、僕なの？」

父「他の人間には、無理だからな」とゲンドウは言い切る。

シンジ「無理だよそんなの！見たことも聞いたことも無いのに、出来るわけ無いよ！」

シンジは、床に視線を落として声を震わせる。

父「説明を受けろ」

ゲンドウは、言い訳を一切受け付けないという態度を続ける。

シンジ「そんな……。できっこないよ！こんなの乗れる訳無いよおっ！」

シンジは、ぎゅっと目をつむって言葉を吐き出す。

父「乗るなら早くしろ。でなければ、帰れ！」

【考察】

ここで強大な父の存在（父性的側面）を示している。父、ゲンドウはシンジにエヴァに乗って使徒と戦うよう強く命令する。それは社会に出ることへの強い要請を意味であり、分離、自立の促しでもある。所謂エディプス葛藤である。

一方で父の「来い」と書かれた手紙で、シンジはわざわざ上京し、父がいるところに向かったのは、父への反発心も持ちながらも、唯一の肉親である父に受け

入れてもらいたい（母性的側面）もあったと考えられ、その思いを打ち砕かれと思われる。そしてまだシンジ自身がそのような心性であるために父の強い（社会への）要請に対してまだ、準備はできていないと強く主張しているように感じられる。

そしてこのゲンドウとシンジのこのときの関わりはシンジにとって幼い頃にゲンドウに見捨てられた状況と反復強迫のようにも感じられる。

エヴァに乗ることを拒み続けるシンジに対し、父、ゲンドウは初号機に綾波レイを載せようと提案し、シンジの目の前に点滴をしている満身創痕の綾波レイがストレッチャーで運ばれてくる。彼女は瀕死の状態でエヴァに乗りこむこともままならない感じだが、それでも彼女はゲンドウの指示に従おうとする。

シンジはその姿をみて

「逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ）」

とつぶやき、決意を固めて顔を上げると

「やります、僕が乗ります！」と言いえヴァに乗り込む。

【考察】

満身創痕の綾波レイが必死にゲンドウの指示に従おうとしている姿をみたときにシンジはエヴァに乗り込むことを決意したが、それはシンジ自身が綾波レイと自分を重ね合わせたと考えられる。シンジ自身の心も非常に傷ついており、屈折した心性になっていたと考えられる。父の手紙で非常事態宣言が出ている最中に第三新東京市に上京したのは、唯一の肉親である父に会いたい、そして庇護を受けたい思いがある一方で14歳になり、自分自身が**変わりたい(引用する)**という思いもあったからと考えられる。

満身創痕の綾波レイを見てシンジは彼女の身代わりになって彼女を救おうとするように、自分自身を救う為にそして自分がどうして上京したのかということを出し、それは今までの自分を変えたいエヴァに乗り込んだと考える。

つまりエヴァに乗り込むことそれは自立し、主体的に社会に関わることであり、シンジにとって今までの自分を変えたいという思いでもあったように感じられる。

2. 碇シンジが成熟していくにはどのようなことが必要であるか？

1) 主体的に社会に関わること、そして抱えること

ガンダムがアムロに乗り込むときでも述べたが、エヴァに初めて乗り込むシンジには色々な戸惑いや不安が生じている。シンジと同じように、思春期の人々も心身の成長そして社会に主体的に関わっていく戸惑いや不安を強く感じている。

NERV の人々はそんなシンジを暖かく見守るが、使徒は容赦無くシンジの乗るエヴァに襲い掛かる。全く歯が立たず、シンジは気を失い、外部からのモニター反応がなくなってしまう。しかしそこからエヴァが再起動し、暴走し、使徒のAT フィールドを引き裂き、使徒に馬乗りになり、使徒を破壊する。

そのエヴァの姿に NERV の人々は啞然としてしまう。

【考察】

シンジは襲いかかってきた使徒に当初は歯が立たなかったが、シンジの意識がなくなり、暴走してから途轍もない力を出し、使徒を圧倒し破壊する。それはシンジの心で考えたとき、「解離」という現象を起こしていると考えられる。

→解離とは？

意識、記憶、思考、感情、知覚、行動、身体のイメージなどが分断されて体験される現象。【平島奈津子】

解離は外傷的体験をきちんと自分の心の中に受け入れる（コンテイン）ことができず、自己を分割させることでなんとか折り合いをつけていこうとする防衛機制である。シンジは外傷体験から生じた激しい怒り（シンジの苗字（碓）？）や憎しみの感情を否認し、情緒的葛藤にさらされたときに解離を起こしたと考えられる。

（妄想分裂ポジションの心性）

解離は主体性の確立を妨げるものであり、アイデンティティの喪失につながる。シンジの心の成熟を深めていくには妄想分裂ポジションから抑うつポジションへの移行が不可欠であり、それにはシンジ自身の情緒をきちんと受け止める（コンテインする）対象が必要不可欠。

→葛城ミサトとの関わりがまず、始まる。

葛城「しかし、あの使徒を倒したって言うのに……あたしもあんまり、嬉しくないのね。」

→シンジが凄い力を持っているが、それが暴走することで倒し、制御できなかった恐れや不安そして、情緒的にコントロールできないでいるシンジの身を案じたものと考えられる。

2) 碇シンジと葛城ミサトの関わりとその限界

父との葛藤という同じ境遇であり、シンジの孤独感に自分を重ね合わせた葛城ミサトは、自宅にシンジを引き取ることにした。

ミサトのアパートの1室で暮らすことになったシンジそのこと自体は受容的な環境であり、湯船でシンジが「葛城ミサトさん……悪い人じゃないんだ……」と呟いたように、シンジにとって抱えられる環境になったと考えられる。

しかしミサトはシンジに父との葛藤という点で共感し、受け入れるある種母性的立場で振る舞う一方で、作戦責任者としてシンジの命令を下していく父性的立場で振るわなければならない。それ故にミサトはシンジの心をきちんと受け止めきれず、シンジは心を閉ざしたままの状況が続く。

①第五使徒を倒した後のシンジとミサトのやりとり

ミサト「どうして私の命令を無視したの？」

シンジ「すいません」

ミサト「あなたの作戦責任者は私でしょ？」

シンジ「はい」

ミサト「あなたは私の命令に従う義務があるの。分かるわね？」

シンジ「はい」

ミサト「今後、こういうことの無いように」

シンジ「……はい」

シンジは、下を向いたまま適当に聞き流すようにして空返事を繰り返す。まるで自分は直接関係がないというような態度を見て、ミサトは声を強める。

ミサト「あんた、本当に分かってんでしょうね？」

シンジ「ええ、分かってますよミサトさん。……もう良いじゃないですか、勝ったんだから。言われれば乗りますよ。乗ればいいんでしょ」

シンジは、投げやりな態度でストローに口をつけた。それを見たミサトは、シンジの襟元を掴んで無理やり立たせる。そして、何かを言おうとするも、シンジの諦めた表情を見てそれを止める。シンジはされるがままに立たされ、ミサトの顔を見ようとはしなかった。

ミサト「……もういいわ、先に帰って、休んでなさい」

【考察】

ミサトは始めに「どうして？」(why)という言葉を使ったが、心理療法では、できるだけ使わないようにとされている。なぜならそれは自分が相手(患者)の言動を理解しようとするよりも問い詰めることからである。

シンジ自身も自身が暴走した行動についてよく解らない部分があるが、その点をミサトは理解し受け止めるのではなく、問い詰め、シンジを追いつめることになっている。そのためにシンジは殻を作り、心を閉ざしてしまう。まるでヤマ

アラシのように誰も寄せ付けず、逆に相手を傷つける(このことを passive aggression という)。それでより腹を立てるミサト。そして双方の思いが乖離していく。そのもどかしさそして自分の無力さにミサトも自身に怒りを感じる。そして

②その後、シンジはミサトから距離をとるようにミサトの家を出ていき、ミサトの家を出たシンジは野宿をする。その後、トンネルを出ようとしたときに意図的に塞がられ、シンジは追跡されていることに気が付き、もう逃げられないと観念する。

「……いいですよ、もう。ミサトさんのところに連れてってください……！」

→ある種、もう子ども頃のように戻れないという観念とも感じられる。

観念：諦めることの意味でもあり、物事について考えることの意味でもある。

そして NERV 本部に連れ戻されたシンジはミサトに尋問をうける。

ミサト「歩いてまわって気は済んだ？ 碇シンジ君」

シンジ「別に、どうでもよくなりました。何もかも。僕に自由なんて無いんだ……。エヴァそのためだけに父さんに呼ばれたんだから。いいですよ、乗りますよ。それでみんながいいんだったら、僕はいいですよ」

ミサト「みんなって、あなたはどうなの」

相変わらず自分の意思を見せようとしなないシンジの言葉を聞いて、ミサトは苛立ちを募らせる。

シンジ「僕には無理だってことはわかってるんですよ。みんなも分かってるんだきっと。それでも怪我した綾波や、ミサトさんや父さんや……」

ミサト「いい加減にしなさい！ 人のことなんか関係ないでしょ！？ エヴァのパイロットを続けるかどうか、あなた自身が決めなさい。嫌ならここを出て行ってもいい。全てあなたの自由よ。好きにすればいいわ」

ミサトは、そう言って出て行ってしまふ。

【考察】

シンジは情緒的葛藤を避けるために自分の殻に閉じこもり、情緒的に距離を

取るように物理的にも距離をとる。その心性は思春期の不登校の生徒の心性と非常によく似ている。(cf 1995 年頃から日本の不登校者数は急激に増加していく)

一旦は情緒的距離を取ったシンジだが、逃げられないと観念し、NERV に連れ戻される。そこでミサトの尋問を受けるが、そこではもう、受容的な関係性ではなく、被支配-支配の肛門期的関係性となっている。その中でシンジはより心を閉ざしてしまい、殻に閉じこもる (passive aggression は強まる)。外見、受身的無気力に見える彼の言動によりミサトは憤りを感じる。ミサトはエディプス葛藤を抱えていたが、それを乗り越え、現在作戦責任者という立場を担っている。一方でそのエディプス葛藤に向き合おうとせず、受身的で主体的になろうとしないシンジに、ミサトはおそらく昔の自分を重ねていた部分があるように考える。そこでシンジとミサトの心はドンドン乖離していってしまう。この会話の中でシンジはこれまでの父子関係を持ち込み、ミサトはいつの間にかそこに巻き込まれてしまい、シンジはよりミサトに不信感を抱き、心を閉ざしてしまう。

しかしシンジ自身「僕には無理だってことはわかってるんですよ。みんなも分かってるんだきっと。」と話していたが、この言葉を否定し、自分が社会の中で

やっつけていける保証をミサトに求めていた部分もあるようにも感じられる。しかしミサトはその言動に腹を立ててしまう。おそらくミサトは色々な過去の父との葛藤を想起させられ、腹を立て、二人の関係はある種破綻してしまう。それはまるでシンジと父、ゲンドウとの再演（反復強迫）がシンジとミサトとの間で行われているようである。

（ゲンドウもミサトも「エヴァに乗れないなら帰れ」というメッセージとなり、ある種シンジを見捨てたような言動になっている。）

→碇シンジの気持ちを受け止めてくれる存在は、同じ境遇でありながらも、シンジの言動に動じず、情緒を受け止める対象が必要

→綾波レイの存在が必要になってくる。

そして綾波レイとの関わりを通じて、シンジは自身の内的世界を省みて成長していく。

3) 綾波レイは碇シンジはどのような存在であり、碇シンジの心はどのように変

わっていったのか？

綾波レイは淡々とあまり感情がない様子で冷たい印象さえ抱く。しかしシンジはレイの前で自分の思いを曝け出し、シンジ自身の内的世界の中でもレイは出てきて、対話し、深めていく。綾波レイはシンジにとって自分自身を投影した対象でも移行対象でもあるように感じられる。

シンジ「綾波、どうしていつも……一人なんだろう」

→この言葉はシンジ自身の投影である一方で自分と似た対象として関心を持っている。

①碇シンジが綾波レイの自宅に向かったシーンについて

綾波レイの部屋：薄暗く、殺風景で人が住んでいるとは思えない部屋。その薬と血のついた包帯が置いてある。

→シンジの内的世界のように感じられる。温もりのない孤独で寂しい世界

シンジが部屋に置いてあったメガネをかけた時に、シャワーから上がったばかりの綾波がそれを見つけ、シンジは押し倒され、裸になった綾波の上に覆いかぶさる。綾波の体に触れたシンジは動揺し、色々言い訳するが、綾波は淡々と着替えて外に出てしまう。

【考察】

これまでシンジが上京してから関わってきた人々は皆、シンジに対して侵襲的で、シンジは周囲の人々（対象）に迫害的に（迫害対象として）感じてきた。

ミサトも当初は受容的であったが、自分を責める迫害対象に変わり、シンジは心を閉ざしてきた。

シンジは偶然といえど、綾波の体に触れるという、相手が怒り叫びだしてもおかしくない状況になり、非常に動揺してしまった。しかし綾波は怒ることなく動じなかった。そのことはシンジにとってこれまでと違った人々（対象）との関わりであったと考える。

(cf 「君の名は」の宮水三葉「胸触った！ヘンタイ！」)

そしてここでシンジと綾波の関係性について考えると、シンジが色々動揺し、

色々な感情が出ていた一方で、綾波は淡々としている。これはこれまでのシンジが関わってきた人々（対象）との関係性が逆転している（以前はシンジが淡々としていた。）。

そのなかでシンジは綾波に対して少し心を開いて、身構えずに話せる人のように感じたのかもしれない。

②NERV 本部のエスカレーターで綾波とシンジが地下に向かうシーンについて

シンジ「……ねえ、綾波は怖くないの？またあのエヴァンゲリオンに乗るのが」

綾波「どうして？」

シンジ「前の実験で、大怪我したって聞いたから、それで……平気なのかなって思って……」

綾波「そう。平気」

シンジ「でも、またいつ暴走して危ない目に会うか……。使徒に負けて、殺されるかもしれないんだよ、僕らは」

シンジは何とか共感が得たくて一方的に話しを続ける。

綾波「……あなた、碇指令の子供でしょ。信じられないの？お父さんの仕事
が」

シンジ「当たり前だよ、あんな父親なんて！」

それを聞いたレイは、思いっきりシンジの頬を打つ。

【考察】

綾波に対して、少し心開いたシンジは、より自身の不安や恐怖を共感してもらおうとして色々尋ねる。シンジは上京し、出会った人々に皆に対して迫害的な感情を抱き、妄想分裂ポジションに陥っていたと思う。そして共感を求める態度は、その状態でとどまっても良い、つまり Adolescence Process に向かうことから退避しても良いという同調を求めているように感じられる。

それに対して、冷淡で愛想のない接し方（塩対応）をする綾波。そして「……あなた、碇指令の子供でしょ。信じられないの？お父さんの仕事か」という。それはシンジが自身のアイデンティティを確立（それもある意味、選ばれた存在であるという）できていないのか？という問いをしているようにも感じる。

それに対してシンジは「当たり前だよ、あんな父親なんて！」というが、それ

はアイデンティティが確立できず、Adolescence Process に向かえないのは父親のせいだとある種他責的な発言とも取れる言葉を吐き捨てる。

それで綾波はキチンと現実に向き合いなさい、目を覚ましなさいという思いで頬を打ったようにも考える。

しかし実際はシンジは「逃げちゃダメだ。」という言葉は何度も呟くように全面的に退避しようとしている訳ではない。Adolescence Process への退避したい思いが強い一方で、きちんと向き合わなければならないとも考えており、そのアンビヴァレントな感情を抱いていると考える。その中で綾波に頬を打たれたことはシンジにエヴァに乗り込もうという思いにさせたのかもしれない。しかし一方で、シンジの思いは受け止めもらえていない。それゆえに Adolescence Process にきちんと向き合っていくには深い情緒的交流が不可欠と考えられる。

③シンジの乗るエヴァは第 6 の使徒の高エネルギーの荷電粒子砲を受けてしまい、シンジはもがき苦しみながら意識不明の重体になり、その中で夢を見る。

シンジは電車に乗っている自分の夢を見る。車窓から夕日が差し込んでいる。

シンジ「嫌なんだよ、エヴァに乗るのが。うまく行って当たり前、だから誰も褒めてくれない。失敗したらみんなに嫌われる。ひどけりゃ死ぬだけ。何で僕はここにいるんだ？」

正面には幼い少年が座っている。シンジは、かつての自分であるその少年を眺める。

シンジ「何か変わるかもって、何かいいことあるかもと思ってここに来たんだ。嫌な思いをするためじゃない」

綾波「そうやって、嫌なことから逃げ出して、ずっと生きていくつもり？」

綾波が傍に立っている。

シンジ「生きる？何で生きてるんだ僕は。生きていてもしょうがないと思っていたじゃないか。父さんもミサトさんも、誰も僕を要らないんだ。エヴァに乗らない僕は必要ないんだ。だから僕はエヴァに乗るしかないんだ。だから僕はここに居られるんだ。……だけど、エヴァに乗ると……」――

そして目が覚めたシンジはヤシマ作戦のスケジュールを綾波に伝えられる。

シンジ「もう嫌だ……。もうあんな怖い思いしたくない。怖くて怖くて……。でも逃げることも出来ないんだ……」

綾波「エヴァが怖いのか？じゃ、寝てたら？」

と言われ、綾波は部屋を出ていき、シンジは取り残される。

【考察】

シンジが第6の使徒にやられて重体になったときにみた夢。それは②のエレベーターでの綾波とのやりとり同じように Adolescence Process への退避が主題となっているが、シンジはこの夢の中で退避したい自分の思いを明確に語っている（言語化）。しかし夢の中で綾波が登場したが、それはシンジ自身の退避したい思いもある一方で現実に向き合っていくことの大切さも感じ始めている現れのように感じられる。つまり綾波は現実に向き合わせるための象徴として出現している。そのアンヴィバレントな感情の中シンジは揺れ動き始め、成熟への一歩を踏み始めているように感じられる。

→その後、ミサトに同じようなことを伝え、ミサトは NERV の地下にいき、シ

ンジにリリースを見せ、シンジはもう一度エヴァに乗ることを決意する。

(ある種ここでミサトはシンジにとって父親的な役割でシンジの思いを受け止め、彼が進むべき道筋を伝えている。)

4) ヤシマ作戦で綾波との関わりでシンジはどのように変わっていくのか？

ヤシマ作戦の説明をリツコから説明を綾波とシンジ二人は受けるが、その作戦ではシンジはいよいよ逃げられず、失敗が許されない絶体絶命な事態であるということを知るが、そのことを受け入れる。

その後、プラグスーツにシンジと綾波が着替えていたシーンで交わされた会話。

シンジ「これで……死ぬかもしれないね」

綾波は制服を脱ぐと、裸のままプラグスーツに体を入れていく。シンジは床に

シンジは、落ちた綾波の下着に気づいて、気まずそうに目を背ける。

綾波「いいえ、あなたは死なないわ」

レイがプラグスーツのスイッチを押すと、ぴったりと体になじむ。

綾波「……私が守るもの」

着替え終わったレイは、更衣室を出て行ってしまふ。

シンジ「僕に守る価値なんて無いよ……」

シンジと綾波は、作戦開始を待つ間、エヴァ搭乗のために立てられた足場に座って夜を眺めているシーン。

シンジ「綾波は、なぜエヴァに乗るの？」

綾波「絆だから」

シンジ「絆？」

綾波「そう、絆」

シンジ「父さんとの？」

綾波「みんなとの」

シンジ「強いんだな……綾波は」

綾波「私には、他に何もないもの」

綾波は立ち上がる。

綾波「時間よ。行きましょう。さようなら」

【考察】シンジの冒頭の台詞は絶体絶命の戦況であるが故に出てきた発言であるが、Adolescence Processに伴う潜伏期が終わり、親の庇護が終わり、自身が一人の個となり責任を伴う青年期に向かっていかなければならないという、覚悟と恐怖の言葉のように感じられる。心理面接をしていた何人かの患者さんが中学卒業間近に「死にたいとか、そういうのではなく、自分が死んでしまう、そういう恐怖に取り憑かれている。」という言葉を出す。

このシーンの時に綾波の着替えのシーンで気まずそうにしているシンジの姿が印象的である。シンジ自身は綾波の下着姿が見えて恥じらいを感じたが、一方で思春期になり、異性の目覚めも感じ、またその感情から距離を置きたいそのアンビバレントな感情に揺れ動いている。

Adolescence Processの喪失に伴い、孤独な感情を強く。そのなかで綾波の言葉はシンジにとって非常に支えになったと思える。しかしシンジは「僕に守る価値なんて無いよ……」というように自分の感情に触れられる怖さから距離を置きたい思いも同時に出ている。

その心の揺れ動きを綾波に投げかけたのが、次のシーンと考える。シンジは綾波にエヴァに乗る意味について問うが、それはエスカレーターの時とのエヴァへの否定的な感情からエヴァに乗る意味について問うのとは異なっている。あくまでエヴァに乗る覚悟についてのシンジの持つアンヴィヴァレントな感情を綾波に投げかけたと考える。それは「どうして大人になる覚悟を綾波はもっているの？」と問いかけたように感じる。それに対して「絆だから」と答えたが、それは「自分が抱えられている（コンテインされている）という感覚があるから」と答えているように感じられる。けれども「私には、他に何もないもの」と答える綾波に対し、抱えられたという母性的な感情に加え、強いシンパシー（共感）を感じたと考えられる。そしてこのシーンは今まで自分の自己愛的な膜に閉じこもっていたシンジが綾波という対象（外界）に対して関心を持ち始め、膜を破り始めたシーンとも考えられる。

5) 使徒との対峙そしてシンジの成長

「（綾波ほどの覚悟もない。うまくエヴァを操縦する自信もない。理由も分からずただ動かしてただけだ！人類を守る？こんな実感もわからない大事なこと、何で僕なんだ？）」

第六の使徒へ陽電子砲をエヴァ初号機に乗って撃つ準備をしているシンジは、自分がこの立場にいることに疑念を抱く。そのためか照準を外してしまう。その後反撃に出る使徒。それによりダメージを受けるシンジ。陽電子砲の再充填を行い、再度狙撃の準備を進める NERV 本部。その指示を初号機にしようとするが、パイロット席で震え慄き、うずくまっているシンジの姿が、モニターに映し出される。

ゲンドウ「現時刻を以って、初号機パイロットを更迭。狙撃手は、零号機パイロットに担当させろ」

ゲンドウ「使えなければ、切り捨てるしかない」

ミサト「待って下さい！彼は逃げずにエヴァに乗りました。自らの意志で降りない限り、彼に託すべきです！」

シンジは、苦痛に耐えながら操縦桿を握りなおす。

『シンジ、頼むで！』トウジの声

『碓、頑張れよ！』ケンスケの声

シンジは、ダメージを受けた初号機の重い体を起こして陽電子砲を抱え上げる。

ミサト「自分の子供を、信じてください！私も、初号機パイロットを信じます」

ゲンドウ「任せる。好きにしまえ」

(略)

ミサト「シンジ君」

シンジ「はい……」

ミサト「今一度、日本中のエネルギーと一緒に、私たちの願い、人類の未来、生き残った全ての生物の命、あなたに預けるわ。頑張ってね」

シンジ「はい！」

シンジは、もう一度使徒に向き合う。

【考察】

これまで自分の自己愛的な殻(膜)に閉じこもって周囲に対して迫害的に感じてきたシンジであったが、綾波との関わりの中で対象に関心を持ち始め、外的世界に目を向けていったと考えられる。しかし主体的に自分が関わることに對し、疑念を抱いていたと考える。ゲンドウの指令にミサトが反旗を翻したことはミサトがシンジにとって父性的な立場に取って代わって担ったと考えられるが、ある種、シンジが外界に関心を持つ中で、シンジ自身の中で強烈な超自我から穏やかな超自我に置き換えられていく過程のように感じられる。そしてシンジ自身が周りの人たちに抱えられていることを認識し、もう一度使徒に向き合い、狙撃の位置に戻ろうとしたと考える。

そしてエヴァ初号機が第二砲撃の準備をするが、その間に第六の使徒から荷

電粒子砲が放たれる。万事休すかと考えられたが、綾波の乗る零号機が盾を構えて使徒の砲撃から初号機を必死に守ろうとしている姿をシンジは目の当たりにする。充填が完了し、シンジがトリガーを引くと使徒に命中し、崩壊する。

その後、シンジは綾波のエントリープラグへ駆け寄り、ハッチをこじ開ける。

シンジ「綾波っ！大丈夫か、綾波っ、綾波！……っ！」

綾波は、シンジの呼びかけに気づいて、眠りから覚めるようにして顔を上げる。安堵するシンジ。

シンジ「自分に、自分には他に何もなくて、そんなこというなよ。別れ際にさよならなんて……悲しいこと言うなよ……」

シンジは肩を震わせて泣き始める。

綾波「何、泣いてるの？」

綾波「ごめんなさい。こういうとき、どんな顔をすればいいのか、分からないの」

シンジ「笑えば……いいと思うよ……」

優しく微笑む綾波。シンジはそっと手を差し伸べる。綾波はシンジの手に自分の

手を重ねる。

【考察】

シンジは外的世界（現実世界）に向き合い、使徒を倒したが、その後、傷ついた綾波の元に駆け寄り、気遣い、彼女に対して思いやりの心を持つ。これは自己愛的殻に閉じこもって妄想分裂ポジションに陥っていたシンジが抑うつポジションに移行し、それに際して、思いやりの心を持つようになったと考えられる。

シンジが「自分には他に何も無いって…」語っていたが、それはヤシマ作戦を聞かされた後に綾波にシンジが語った言葉「これで……死ぬかもしれないね」「僕に守る価値なんて無いよ…」と言っていた言葉と同じ意味だと考える。

そのシンジが放った言葉を綾波が静かに受け止め、シンジが抑うつポジションに移行する中で、自分の放った言葉が彼女を非常に傷つけてしまったかもしれないと感じ、償いたい、思いやりの心もち、シンジは成熟していったものと考えられる。そしてシンジと綾波が手を取り合ったシーンは、対象と繋がりを持ち、「絆」を形成した象徴とも感じられる。